

イデアと同一性をめぐる対話〔I〕

—Platon, *Rep.* 597C1–D3 を端緒に—

山 川 偉 也

登 場 人 物

アリスタゴラス	(<i>Ἀρισταγόρας</i>)
バッケイオス	(<i>Βάκχειος</i>)
ゲンナイオス	(<i>Γενναῖος</i>)
ディオクレス	(<i>Διοκλῆς</i>)
エイロネイアス	(<i>Ἐιρωνείας</i>)
ゼノン	(<i>Ζήνων</i>)

目 次

- I 問題および *Rep.* 597C1–D3要約
- II 議論の諸前提とその解釈(1)
- III 議論の諸前提とその解釈(2)
- IV 第三人間論と意味論的パラドックス
- V イデアの離在性
- VI プラトンの言語階型理論
- VII パラダイグマ・イデアの同一性(1)
- VIII パラダイグマ・イデアの同一性(2)
- IX 結 語

——以上本号

I

アリスタゴラス 古代ギリシアのタルゲリオン月の七日にあたる今日このめでたい日に、あの流れゆかしいケーピソス川のほとりに、紀元前四二七年、われらが共通の知恵の祖（おや）であるプラトンは生まれました。われわれはこのめでたい日を記念し、プラトンを讃えるために集まり会し、彼にふさわしい知恵の愛求を彼の言葉そのものに関与して行なうのを年ごとの慣わしとしてまいりました。

前年は、プラトンが『饗宴』で展開しておるエロースの説について、まさにともに飲みかつ喰べつつ心ゆくまで問答しあったわけではありますが、本日は、いわばその続編ともいうべき＜寝椅子（クリネー）＞について語りあってみたいと思うのであります。と申しますのも、飲み喰いにあたって身を横たえるものこそは寝椅子だろうからであります。とはいえ、『国家』597C1—D3 にみいだされるところのこの寝椅子談義は、プラトンの中期イデア論思想の、疑いもなく中心的な位置を占める、ひとつの基本命題の表明として古来有名なものであるばかりではなく、『パルメニデス』におけるいわゆる 第三人間論に対する数少ない有力な反証根拠を提供するものとみなされてきた点においても、はなはだもって興味深い箇所なのであります。

しかしながら、実のところ、この点につきましても賛否両論いろいろでありまして、ご存知のとおり、ロス⁽¹⁾は、この箇所が第三人間論（以下には **TMA** と呼ぶことに致しましょう）に対する有効な反証根拠たりうるとみなしたアーペルト⁽²⁾およびコーンフォード⁽³⁾の見解を却下し、この箇所でのプラトンの議論は **TMA** を反撃しうるものではないと主張したのであります。私自身は、ロスの主張が妥当であるか否かについて疑念をもつものであるが、ここにその疑

(1) D. Ross, *Plato's Theory of Ideas*, 1951., p. 87.

(2) O. Apelt, *Platons Dialog Parmenides*, Der philosophische Bibliothek, Bd, 83, 1922. ; *Beiträge zur Geschichte der Griechischen Philosophie*, S.53.

(3) Cornford, *Plato and Parmenides*, London, 1939. 3 impr. 1951., p. 90.

念を長々と開陳するには及ばぬでありましょう。それは論理的検討に耐えうるものではないかに思われるのであります。^{〔補注1〕} だが、ロスのプラトン解釈に近いところから出発して、いっそう論理的にこの箇所を検討したヴェドベリ⁽⁴⁾は、驚くべきことに、この箇所に **TMA** と同じ論理構造をみいだしたのであります。さて、私の思うに、もしヴェドベリが正しいなら、『国家』のこの論議は、**TMA** の反証根拠たりうるどころか、プラトンがこの議論に対する有効な反撃をなしえなかったであろうことは、まずほとんど確実なこととみなざるをえないと思われるのである。なぜかと申すなら、プラトン晩年の著作であると一般に認められている『ティマイオス』31A—Bにおいても、『国家』のこの箇所での議論と本質的に類似した議論が展開されているのでありまして、しかもその議論は、この可視的宇宙が一個だけあるか、それとも原子論者たちがいうように無限個あるのかという重要なコンテキストにおいて決定的役割を果たすものとして登場してくるからであります。明らかに、『パルメニデス』132A—Bとは事情を異にして、『国家』および『ティマイオス』のそれぞれの議論は、プラトンのアイデア論の生命線をかたちづくるものであります。

さて、みなさん、**TMA** に関してそのような微妙な関係にあるこの『国家』の議論は、それ自体としても重要なものです。なぜなら、この箇所での議論はしばしば、一般にアイデアの唯一性の証明だと解されることがあるからです。しかし、そのような証明が真になされているかどうか、これはたしかに微妙な問題なのです。なぜなら、証明というかぎり、私たちは、その証明が依拠するところの諸前提を与えられていなければならないからです。しかしながら、アイデアの唯一性の証明に用いられる諸前提とは、プラトンのアイデア論において何であるかと問うならば、私自身としてはやや不安にならざるをえないのであります。そしてむしろ、プラトンはアイデアの唯一性を公理として立てたのであって、それを証明するなどということは企てもしなかったのではないかと、思っ

(4) A. Wedberg, *Plato's Philosophy of Mathematics*, Stockholm, 1955. cf.

Chapter III, note 18. 拙訳『プラトンの数理哲学』法律文化社

てみたりもするのであります。

以上、『国家』の寝椅子論議がはらむ問題の一端を申し上げました。では次に、『国家』の当該箇所そのものを読み上げておきましょう。私の仕事そのものは、このように老人でもありますので、それくらいにさせていただいて、議論はここにいるゲンナイオス君に引き継いでいただきたいと思いますと思っています。もちろん、進行係は務めさせていただきたいと思っています。

Rep. 597C1—D3におけるプラトンの言葉を、便宜上、三段に分けて紹介致します：

- 1 Ὁ μὲν δὴ θεός, εἴτε οὐκ ἐβούλετο, εἴτε τις ἀνάγκη ἐπῆν μὴ πλεον ἢ μίαν ἐν τῇ φύσει ἀπεργάσασθαι αὐτὸν κλίνην, οὕτως ἐποίησεν μίαν μόνον αὐτὴν ἐκείνην ὃ ἔστιν κλίνη δύο δὲ τοιαῦται ἢ πλείους οὔτε ἐφύτευθην ὑπο τοῦ θεοῦ μὴ φυῶσιν.

ここでは、要するに、神（といっても、プラトンがこうした神を信じていたわけではありません。⁽⁵⁾ それは現実の寝椅子の像を描く者〔画家〕、そして、現実にあるあれやこれやの寝椅子を作る職人への言及のゆきがかかり上、登場させられているにすぎません）は、「あのまさに寝椅子であるところのもの」（αὐτὴν ἐκείνην ὃ ἔστιν κλίνη）を唯一つにかぎって作ったのであって、二つないしそれ以上は作らなかったと言っています。次にその理由を述べる文がやってきます。

- 2 Ὅτι, ἦν δ' ἐγώ, εἰ δύο μόνας ποιήσειεν, πάλιν ἂν μία ἀναφανείη ἥς ἐκείναι ἂν αὖ ἀμφοτέραι τὸ εἶδος ἔχοιεν, καὶ εἴη ἂν ὃ ἔστιν κλίνη

(5) cf. F. M. Cornford, *The Republic of Plato*, Translated with Introduction and Notes, Oxford., rep. 1961., pp. 315—316.; cf. also Ross, *Plato's Theory of Ideas*, pp. 78—97.

ἐκείνη ἀλλ' οὐκ αἶ δύο.

これは重要でしょうから直訳しておきましょう。「『というのはだね』とぼくは言った、『もし彼が二つだけでも作ろうものなら、⁽⁶⁾ それら二つのものがまたそのものの相 (τὸ εἶδος) をもつことになる一つのもの〔寝椅子のアイデア〕がふたたび現れてくるだろう、そして、真に寝椅子であるところのものはこのものなのであって、それら二つではないことになるだろうからである』」。で、次に、そうした二つの寝椅子はアイデアではなく、寝椅子職人の作る寝椅子といったものにすぎない、ときっぱり言われます。

3 Ταῦτα δὴ οἶμαι εἰδὼς ὁ θεός, βουλόμενος εἶναι ὄντως κλένης ποιητῆς ὄντως οὔσης, ἀλλὰ μὴ κλένης τινὸς μηδὲ κλινοποιός τις, μίαν φύσει αὐτὴν ἔφυσεν.

すなわち、少し文脈に即して申しますと、唯一の寝椅子のアイデアの製作者としての神は、〔それら二つの寝椅子のような〕これやあれやの特定の寝椅子の製作者たろうとはしなかった、というのであります。ここで《特定の寝椅子》と言われているのは、597A2でのそれ (κλένην τινὰ)，すなわち、われわれが見たり触れたり、その上で横たわったりすることのできるそれ、すなわち寝椅子職人が作るところの、またわれわれが感覚的に把えることのできるところの寝椅子であります。

さて、以上が私の果さなければならなかった仕事です。ではゲンナイオス君、きみの仕事をはじめたまえ。

(6) εἰ δύο κτλ. に関して J. Adam, *The Republic of Plato*, edited with critical notes, commentary and appendices, vol. II p. 391 を参照。Adam は δύο μόνας を 'no more than two' "auch nur zwei" (Schneider) と取り、ここでの議論を *Tim.* 31A に関連づける。そしてさらに、*Parm.* 132E ff. および *Arist. Met.* Aq. 990b17 への参照をうながす。

バッケイオス いや少し待って下さい。アリストゴラス、あなたのいま読み上げられたプラトンの議論は、はたして私どもが本気になってとりあげるほどの価値のあるものでしょうか？

アリストゴラス というと、どういうことですか？

バッケイオス 詭弁ではないかと思うのです。私は、この議論を、厳密に言くと、これは明白な *petitio principii*（論点先取）ではないかと、思うわけですよ。私はね、なぜか、再構成してみましょう。いまの議論を、次のようになります。すなわち「寝椅子のアイデアは唯一である。〔証明〕なぜなら、もし寝椅子のアイデアが二つあるならそれらは真に寝椅子のアイデアであるのではない。すなわちそれらはアイデアではなく感覚物であり、したがってそれらは唯一の寝椅子のアイデアの写像にすぎない。そしてこの唯一の寝椅子のアイデアこそ真に寝椅子のアイデアである。ゆえに寝椅子のアイデアは唯一つ存在する」。

プラトンの意図はこうです：寝椅子のアイデアは唯一つ存在することを証明するのに、彼は、帰謬法に訴え、寝椅子のアイデアが二つ存在すると仮定すると、その仮定からは不条理な帰結がえられることを示すことによって、その仮定が却下されなければならないことを明らかにし、それゆえに寝椅子のアイデアは唯一つ存在すると主張します。ところが、実際上のプラトンの証明は不正です。なぜなら、反駁さるべき仮定を不条理だとして却ける根拠として、証明さるべき言明「寝椅子のアイデアは唯一である」がすでにして前提されているからです。これは *petitio principii* 以外の何物でもないでしょう。

ゲンナイオス 言葉を慎しみたまえ バッケイオス君、プラトンともあろう人がそのような愚かしいことをなすはずがないのだ。実際、寝椅子のアイデアが唯一であることを証明するために寝椅子のアイデアは唯一だということを前提するなどいうことをプラトンはいっさいやってはいないのだ。彼が寝椅子のアイデアを二つ仮定するのは不条理だとする根拠は、この箇所での議論に先立つアイデア論の諸公理に求められるのであって証明さるべき特定の言明「寝椅子のアイデアは唯一である」に求められるのではないのだ。

バッケイオス では、きみのいうアイデア論の諸公理とは何であって、また、それら諸公理を組みこんだ場合のこの議論はどのように再構成されるというのかね？

II

ゲンナイオス では、それらの諸前提を呈示するとともに、それらに対する私の解釈を与えてみよう。なお、私は、以下の討論の便宜を考え、プラトンの言葉の前にナンバーを打つことにする。さて、諸君、実のところわれわれがいま問題にしていた 597C1—D3 の議論にとりかかるに先立ち、ソクラテスとその問答相手との間で、次に述べるようなアイデア論の基本的要請が認められていたのです。すなわち：

I-1 *Βούλει οὖν ἐνθένδε ἀρξώμεθα ἐπισκοποῦντες, ἐκ τῆς εἰωθυίας μεθόδου ; εἶδος γάρ πού τι ἐν ἑκάστον εἰώθαμεν τίθεσται περὶ ἕκαστα τὰ πολλά, οἷς ταῦτόν ὄνομα ἐπιφέρομεν.* (595A5—7. 下線部訳：「というのは、われわれは、われわれが同一の名を適用する多くのものどもから成る集まりの一組ごとにそれぞれ一つずつエドイスを措てる慣わしになっているから」)

I-2 *Καὶ αὐτὸ δὴ καλὸν καὶ αὐτὸ ἀγαθὸν, καὶ οὕτω περὶ πάντων ἅ τότε ὥς πολλά ἐτίθεμεν, πάλιν αὖ κατ' ἰδέαν μίαν ἑκάστου ὥς μιᾶς οὐσης τιθέντες ὃ ἔστιν ἑκάστον προσαγορεύομεν.* (507B5—7. 下線部訳：「それぞれのもの〔多である各自〕の有する単一の相（特質）に応じて一なるもの〔アイデア〕が在るとして、このものを、われわれはまさにそれぞれであるところのものと呼んでいる」)

I-3 *Καὶ τὰ μὲν δὴ ὁρᾶσθαι, φάμεν, νοεῖσθαι δ' οὐ, τὰς, δ' αὖ ἰδέας νοεῖσθαι μὲν, ὁρᾶσθαι δ' οὐ.* (507B9—10 下線部訳：「一方のもの〔多であるもの〕は見られるが思惟されず、他方アイデアは逆に思惟されるが見られない、とわれわれは主張する」)

さて、この段階で私は $I-1$, $I-2$, $I-3$ について解釈を与えておきたいと思う。現代での集合論ないしクラス理論は個物、個物のクラス、クラスのクラス……といったものを考える。その場合、たとえば個物のクラスということであつうに考えられているのは、その要素自体から組み立てられる対象といったものではない。オリオン座はいくつかの星のクラスであるが、しかしこの星座自体は星ではない。通常のクラス理論のいうクラスとは、実際、特質とか内包とかいわれるもの以外ではないのであって、クラス理論につきまとうパラドックスをおおまかに度外視していえば、「個物 x がクラス F の一要素である」とは「個物 x はひとつの F である」と同値だとされるのである。この方式はクラスという普遍者をたんなる偽名称として個物の世界に閉じこめようとするものである。クラスの包含関係、たとえば「クラス F はクラス G に包含される」は実在物としてのクラス相互間の包含関係としてではなく、ただたんに「任意の x について、 x が F であるならば、 x は G である」を意味するものとして解釈される。こうした方式を採る人々からみれば、プラトンのイデア論は不徹底なクラス理論の産物だということになるだろう。プラトンは個物を 0 階に置き、その基礎の上にあらゆるものを築き上げるという方式は採らない。感覚的に捉えられる物の世界は流動・変化の世界である。いま a であるに見えるものはやがて a でなくなってしまう。そして a と b との境目もあまりはっきりはしない。そうした個物のみを頼りにすることはできない。しかしまた、だからといって、個物の世界は完全な無明世界であるのでもない。明晰の極みにおいてであるとはいえないけれども、 a と b とを指示し、 a と b とはともに F であると漠然と思ひなすことができる程度には明るい世界である。つまり、ロゴスが、あたかも日光のように、さしこんできている世界である。その明るさの中で、われわれは、 a と b とがひとつの F なる名のもとにくくられているのを見る（理解する）わけである。 a と b とがともに荷負う分け前（モイラ：運命）としての名、それらに刻印される相（エイダス、イデア）はしかし、 a または b 自身がその本性において ($\tau\eta\ \phi\acute{o}\sigma\epsilon\iota$) 備えているものではなく、名にしても相に

しても、それらは本来 a や b がそのものによって辛うじて存在を得ているところのあのものの名であり相であるのである。 a や b はそのものを分有し ($\mu\epsilon\tau\acute{\epsilon}\chi\epsilon\iota\nu$) そのものの写像 ($\mu\epsilon\mu\acute{\eta}\mu\alpha\tau\alpha$) であることによってみずからの相の範型 ($\pi\alpha\rho\acute{\alpha}\delta\epsilon\iota\gamma\mu\alpha$) たるそのものの類似物となるのである。 a や b が荷負うひとつの相、その相に対応してひとつのイデアが存在し、 c や d が荷負うひとつの相、その相に対応して別のひとつのイデアが存在するのである。逆にいうならば、それぞれのイデアは、たとえば a や b 、また c や d といったものが荷負うところのそれぞれの相を、一対一に規定するところの範型因なのである。ここで一言注意を喚起しておきたいのは、このように考えられるかぎりでの範型因としてのイデアはいかなる意味におけるクラスでもないということ、すなわちなんらかの普遍者としてのクラスでもなければ、さらにまたレシニエフスキーの考えるようなメレオロジークラス⁽⁷⁾でもないということである。

さて、I-1は、 F であるすべての x の F という相に対応してひとつのイデア ϕ が存在するという。 F に一対一に対応するかたちでイデア ϕ が存在するという。 F がいまもし「美」という相であるとするならば、この相に対応するイデア「美そのもの」すなわち美のイデアが存在するというのである。I-2 における $\mu\iota\acute{\alpha}\varsigma\ \omicron\upsilon\sigma\eta\varsigma\ \tau\iota\theta\acute{\epsilon}\nu\tau\epsilon\varsigma$ はイデア ϕ の唯一性の主張だととりたいところである。しかしそれは少くとも次のことを実質的に含意すると思われる：すなわち、いまもし個々の多くのもの、たとえば a, b, c が F というひとつの相のもとにまとめられて一つのクラスをかたちづくっており、またそれとは別箇に個々の多くのもの、たとえば d, e, f が G というひとつの相のもとにまとめられて一つのクラスをかたちづくっているときには、 F と G というそれぞれの相に厳密に一対一に対応するかたちで、たとえば特定のイデア Φ と Ψ とが存在

(7) T. Kotarbinski, *Wykłady z Dziejow Logiki*, 1957 (松山訳『論理学史』合同出版)YYVIII. Lejewski, C., *Zu Lesniewskis Ontologie*, *Ratio*, Vol. 1, 1958.

(石本・渡辺訳, 「レニエフスキーの存在論について」, 石本訳編『論理思想の革命』東海大学出版部, 1972;

するということ，そしてもし万一 Φ が F に対応するアイデアであるとともに Ψ もまたまさにその同一の相 F に対応するアイデアであるというようなことがあるなら，その場合には， Φ は Ψ と同一のアイデアであるということである．そして I-3 は，たとえば F という相をもつ a ——これをまあ F/a というように表現しておこう——や G という相をもつ d —— G/d ——は見られ，感覚の対象となるが純然たる思惟 ($\nuόησις$) の対象とはならず， Φ や Ψ は純然たる思惟の対象とはなるが感覚の対象とはならない，と主張する．ところで，この場合のたとえば Φ と F/a との関係は，前後の文脈において範型 (παράδειγμα) と写像 ($\text{ὁμοίωμα, μέμημα, εἰκών}$) のそれであること，そしてさらに分有されるものと分有するものとの関係であるということが同意されている．この事態を私は以下に引用される文とともに II-1 と番号づけたいと思う．さて，この範型—写像関係において重要なことは，たとえば Φ の相を受け取ることになる a は Φ ではないということ， Φ を分有する a は Φ ではないということ，一般に ϕ を分有するいかなる x も ϕ ではないということである．これを II-2 としよう．これら II-1 および II-2 はプラトンの諸対話篇のいろいろな箇所においてみいだされうるが，さしあたってわれわれの議論している『国家』の当該箇所に近いところから探すとなれば，596B6—10 における発言が引用されてよいであろう．ここでは，便宜上，本来ひとつながりの文を二つに分けて引用することにしよう．

II-1 Οὐκοῦν καὶ εἰώθαμεν λέγειν ὅτι ὁ δημιουργὸς ἐκατέρου τοῦ σκεύους πρὸς τὴν ἰδέαν βλέπων οὕτω ποιεῖ ὁ μὲν τὰς κλῖνας, ὁ δὲ τὰς τραπέζας, αἷς ἡμεῖς χρώμετα, καὶ τᾶλλα κατὰ ταῦτά;

(下線部訳：「〔モデルとなる〕そのアイデアを凝視しながら，一方は寝椅子を，他方は机を作るのである」)

II-2 οὐ γάρ που τὴν γε ἰδέαν αὐτὴν δημιουργεῖ οὐδεὶς τῶν δημιουργῶν· πῶς γάρ;

アイデアと同一性をめぐる対話

(下線部訳：「なぜなら，職人たちのうち誰一人として，アイデアそのものを作ったりなどはしないのだからね」)

さて，みなさん，以上が私たちのあの議論に先立って与えられていた諸前提のうち重要なものと私の考えるものであり，またそれらに対する私の解釈です。

では，あのプラトンの寝椅子論議は，はたして *petitio principii* を犯しているであろうか．決してそうではない，と私は考える．なぜなら，この議論は次のように再構成されうるからである．

個々のものがそれを分有するゆえに寝椅子であると呼ばれるところの寝椅子の相をいま S とせよ．そのとき S に対応するところのアイデア，すなわち，個々のもの a, b, c, \dots を $S/a, S/b, S/c, \dots$ たらしめるところの範型アイデア Σ はただひとつにかぎって存在する．

仮定 S に対応する範型アイデア Σ_1, Σ_2 が存在し， $\Sigma_1 \neq \Sigma_2$ ．

上の仮定が不条理であることが証明されるなら， Σ が唯一であることが証明されたことになる．そしてその証明は次のように行なわれる．

- 1 Σ_1, Σ_2 は S という相をもつアイデアであり，ひとつの集まり，すなわち多を構成する．
 - 2 I-1 により $S/\Sigma_1, S/\Sigma_2$
 - 3 I-2 により S に対応するなにかひとつのアイデア Σ が存在する．
 - 4 II-1 により， Σ_1, Σ_2 は Σ を分有する．
 - 5 II-2 により， Σ_1, Σ_2 は S に対応する範型アイデアではない．それゆえ S に対応する二つの範型アイデア Σ_1, Σ_2 は存在しない．
-

以上の証明は、われわれがプラトンのイデア論の基本的要請だと認めたところのものみに拠って行なわれた。それゆえ、プラトンの議論はなんら *petitio principii* ではないのである。ただ、ここで一言。私の証明のなかでの I に関して付言するならば、 Σ_1 , Σ_2 は、それらが寝椅子であるかぎり、 S なる相を持っているのであり、その相をあの「まさに寝椅子であるところのものそのものからもらってもっているのであって、このまさに「寝椅子であるところのものそのもの」こそは、まさに真に寝椅子であるところのあの唯一なるものなのである。……おや、バッケイオス君、なにがおかしいのかね？

バッケイオス 語り伝えるところによればディオゲネスは、プラトンの「……そのもの」とか「まさに……であるところのもの自体」とかの言葉づかいにすっかりイライラさせられたそうだが、あなたの議論を聞いていて、ぼくもまったくディオゲネス先生に同情したくなりましたね。しかもあなたの証明たるやまったくよろしくない。実際、あなたの証明そのものがまさに *petitio principii* であるところのものそのものであって、プラトンその人の詭弁ぶりと好一對である。とくにあなたの I がまさによろしくないところのものそのものである。これはまったく明らか。

ゲンナイオス どこがよくないというのか。

バッケイオス (なんとまあ鈍感なプラトン亜流先生。/) きみは犯したのだ、きみ自身がプラトンのイデア論の基本的諸要請のひとつだとしてあれほど見事に定式化した II-2 からの必然的帰結を。

ゲンナイオス きみの言い分をはっきり言ったらどうだ。

バッケイオス きみは II-2 をたしかこのように定式化した。「イデア ϕ を分有するいかなる x も ϕ ではない」と。そうではなかったかね？

ゲンナイオス そう、そのように定式化した。

バッケイオス このきわめて重要なイデア論の公理が意味するものは、「範型イデア ϕ は、いついかなるときにも、その写像の地位に身を落すことはない」ということではなからうか。つまり、「範型イデア ϕ が (きみの言うところの)

F/x の x に代入されるようなことは決してない」ということではなからうか。

ゲンナイオス そう。

バッケイオス すると、次のことほど明白なことではないではないか。 Σ_1 , Σ_2 は寝椅子の範型アイデアだと仮定されたのだから、それらはそれらがアイデアであるかぎりには S という相をもつことがないということは。もっとも、 Σ_1 , Σ_2 は寝椅子のアイデアだと仮定したがその実仮定しなかったのであってアイデアではないことにしてあったのだときみが主張するなら話は別だ。そんな子供でも信用しないような手品論理にはぼくとしてはついていく気は毛頭ないね。ミソロゴス（言論嫌い）のそしりを受けつつ甘んじてこの場を去らせてもらうよ。「今日こそはプラトンを讃えるつもりであったが、あいもかわらずまたしても冷厳な事実が私をそうすることから阻んだのだった」と呟やきながらね。

ゲンナイオス いまのきみの発言はまったくがまんならない。さっさと好きなように退場するがいいのだ。

アリスタゴラス みなさん落ち着いて下さい。少しばかりの言論を交わしたばかりで、意見が真に対立してしまったものと断定するのも、われわれの日頃の志（ところざし）とおおいに異なるところでどうかと思われるのですが、なによりもそのように感情を荒立ていがみあうのがよくないではありませんか。それではまるでソクラテスによって質問せめにされて大衆の前に恥をさらしかねないともみるや猛然といきり立ちソクラテスの質問をやめさせるためならどんなことでもやりかねなかったあの政治家や悲劇作家たちと変るところがなくなってしまうではありませんか。知の探究にいそしむほどの者は、目で見ただちに得られるような真理を求めているのではなく、長い苦闘の末に、得られるかどうかは分らないものに一切を賭けて言論の大海原を乗り切ろうという心づもりを持っているはずなのですから、はしたない陸上の獣類に身を落すようなことはやめようではありませんか。というのも、まあ半ばは冗談でしょうが、『ティマイオス』の最後のところでプラトンは、陸上をはいまわる獣類は、頭の中の軌道を用いることをやめてしまい、胸にある魂の指導のままに生き、哲学に

いそしむことも天を眺めることもなかった男たちが生まれ変わったなれの果てだと言っているからであります。

ディオクレス おっしゃるとおりだと思います，アリストゴラス．私たちは議論の勝ち負けは度外視して，事柄の正否のみを問題にすべきなのです．バッケイオス，きみも先ほどのことは取消してここでのみんなの議論に加わるべきだよ．

バッケイオス いや悪かった．私がゲンナイオスを責めたのは，おそらくおかどちがいったのだ．私がゲンナイオスの証明にみいだした *petitio principii* は，元来，ゲンナイオスのものではなくてプラトンのものなのですからね．ゲンナイオスはプラトンの誤りを正直に映しだしながら自分では自覚しなかっただけのことなのです．私はいまこそはっきり断言できるが，プラトンのイデア論体系には，それを根本的に損うことになるひとつの公理「 F のイデアは F という相をもつ」あるいは「 F のイデアは F である」あるいは「 F のイデアは自己自身を分有する」あるいは「 F のイデアは自己自身の写像である」を含みもっていたのである．しかし，プラトンはそのことを決して自覚しなかったのである．おおゲンナイオスよ，きみはおそらく，「二つの寝椅子のイデアは，それらが寝椅子であるかぎり，『寝椅子』という相をもっている」とか，それら「二つの寝椅子は『まさに寝椅子であるところのもの』からその相をもらってもっている」とかの主張に，なんの矛盾もみいださないであろうが，そのことはプラトンとても同様だったのだ．きみがそれらの語法に含まれている意味を十分に自覚できなかったのも無理からぬことであって，実際，このことの意味についてはプラトン自身が無知の闇のうちに置かれていたのだ．ところが，そうした無自覚な主張のうちに含まれていたものこそは，イデア論を破滅に逐いやるものだったのだ．というのも，そのような主張をなすことは，それら二つの寝椅子ばかりではなく，その唯一無二だといわれる「まさに寝椅子であるところのものそのもの」が寝椅子の相をなにかからもらってもっていることを断然確実に告げているからだ．なぜなら，みずからのもってはいないものを，

どうしてそれは他の二つのものに与えようか。日本国の大ドロボウとかいうネズミ小僧次郎吉をおのが稼業の手本と拝み、彼の墓石からその小片を失敬してゆくコソ泥のことを考えてみよ。かのコソ泥はその小片を肌身に著けて、呪術的に、その大ドロボウが完全にもっていたという盗みのテクニクの一部なりともに《与かり》(participate in), できることならそのテクニクを《分取り》(分有し), かの大ドロボウそのものに《融即》して(レヴィ・ブリュルを想起あれ), 次郎吉性(Jirokichi-ness)を体現したいものと願うのだが, 所詮, 手本と現実とはちがうのであって(アイデアのコーリスモス), 不完全なものにとどまらざるをえないというわけである(『パイドン』74D—Eの議論を想起せよ)。

さて, 「 F のアイデアは F である」(これをIIIとしよう)とせよ。すると, Rep. 597C1—D3は寝椅子のアイデアの唯一性の証明どころか, その無限多の証明となるのだ。なぜなら, ゲンナイオス, きみの証明は次のようにも書き換えられるからだ。

寝椅子のアイデアは無限多である。

〔証明〕

- 1 個々の寝椅子がそのメンバーであるひとつのクラス A があって, その各メンバーは一つの相 S を共有することによってそのクラスのメンバーであるとせよ。また, S に対応する二つの範型アイデア Σ_1, Σ_2 が存在して, $\Sigma_1 \neq \Sigma_2$ とせよ。
- 2 II-2により, $\Sigma_1, \Sigma_2 \notin A$ 。
- 3 IIIにより, S/Σ_1 かつ S/Σ_2 。それゆえ, われわれは A のメンバーに加えて, Σ_1, Σ_2 をそのメンバーとするひとつの新しいクラス $A' = A \cup \{\Sigma_1, \Sigma_2\}$ を得る。

- 4 I-1により、 A' のすべてのメンバーが S であることに対応する一つの範型アイデア Σ が存在する。
- 5 II-2により、 $\Sigma \notin A'$ 。
- 6 IIIにより、 S/Σ 。それゆえわれわれは A' のあらゆるメンバーに加えて Σ をそのひとつのメンバーとするひとつの新しいクラス $A'' = A' \cup \{\Sigma\}$ を得る。
- 7 I-1により、 A'' のあらゆるメンバーが S であることに対応する一つの新たな範型アイデア Σ' が存在する。

このようにして無限に至る。こうして、われわれはそれぞれに異なった寝椅子のアイデアのひとつの無限系列、 $(\Sigma_1, \Sigma_2), \Sigma, \Sigma', \Sigma'', \dots$ を得るのである。

さて、注目に価するのは、みなさん、このタイプの推理が（最初のところだけ少し異なるが）、まずは寸分たがわず *Parm. 132A1—B2* のいわゆる《第三人間論》(*TMA*) と論理構造をひとしくしているということでもあります。このことから重要な二つのことが帰結します。すなわち、(i) *Rep. 597C1—D3* は *TMA* を用意するものではあってもその反証例とは決してならないということ、(ii) しかもプラトンは *Rep. 597C1—D3* の執筆時にそのことを決して自覚しなかったし、そしておそらく生涯そのことを自覚しなかったであろうということ、この二つです。そしてこのうち後者については *Tim, 31A—B* がその証拠を提供するのです。ついでながらなおも申し添えるならば、IIIをなんらかのかたちで認めることなしには、 Σ_1, Σ_2 を仮定することの不条理性は決して証明されないだろうと思われるのです。

III

アリスタゴラス これは、どうも、プラトンを讃えるためのわれわれの集まりは、少し困ったことになってきたようですね。先ほどのバッケイオス君の発言の趣旨によりますと、「アイデアの唯一性を証明することは **TMA** を反証することにはならない」(ロス)どころか、アイデアの唯一性を首尾一貫して証明しようとするならば、それはむしろ無限多の証明となってしまうというわけですね。

ディオクレス そのようですね。ところでアリスタゴラス、**TMA** なる議論について私はよく承知してはいないのですが、それはアカデメイア外の誰かがアイデア論に加えた批判なのでしょうか？

アリスタゴラス さあそれは……いろいろに推測されもするのですが、要するに問題はプラトン自身がその議論を彼の対話篇『パルメニデス』でとりあげて、登場人物パルメニデスをしてアイデア論を批判させているということ、そしてどこにおいても彼は公けにそれを却下していないということにあるのです。

ディオクレス それはどうも妙な話ですね。プラトンというひとは、自分で解けない謎を自分にかけて喜ぶといったふうなひとだったのでしょうか。

アリスタゴラス さあ、それは……なにしろずいぶん昔のひとですから。でも、たしかにそんな要素ももっていたかもしれませんね。ご存知のとおり、プラトン没後のアカデメイアは、なにか神秘色を強めるとともに、他方では懐疑派の牙城のようなものにもなっていましたからね。……しかし私たちとしては、心理的にあれこれとプラトンのおもわくを推量するのではなく、結局はプラトンの残している言葉そのものに即して問題を追求するしかないでしょうね。

ディオクレス それはそうでしょうね。しかしそれでは私たちはどうすればよいのでしょうか。言葉はすでにゆきづまっているように見えるのですが？

エイロネイアス やはり、プラトンの議論は詭弁臭いですね。たとえばこんなことを彼の議論に関して堂々と言う人があるんですね：「**TMA**は独断的推論で

アイデア論に暴力を加えることなしには成り立たないものであるが、*Rep. 597 C1—D3*におけるアイデアの唯一性の証明は正当な手つづきを経て得られた結論である」。ところが妙なんです。その人が「正当な手つづきを経た証明」と言っているのは、さきほどゲンナイオスが提出したのとだいたい同じものでして、「 Σ_1 , Σ_2 はその寝椅子の相をそれら以外の何か他のものからもらってもっているのだから、真に寝椅子であるのはそれら Σ_1 , Σ_2 ではなくて、そのひとつのものだ」というわけです。どうもぼくはこういう議論を聞くとなんとなく情なくなってきましたね。「またか」と思うとともに、どうしてこういった人たちは自分たちの非論理ぶりに気づかないのか不思議に思うわけです。こういったものが論証なら、世の中に妥当な論証でないような非妥当な論証をみいだすのはよほど困難なことですよものね。このひとたちは、(1)「真に寝椅子であるものはそれ自体寝椅子である」、(2)「寝椅子であるところのものはすべてその相を真に寝椅子であるところのものからもらってもっている」、という前提を認めながら、奇妙にも、(3)「真に寝椅子であるところのものはそれ自体寝椅子ではあるがその相を他の何かからもらってもっているのではない」、そして、(4)「その相を他には与えるが、他からは与えられることのないものが真に寝椅子であるところのものであり、このものは唯一である」と主張するのです。これはどうも支離滅裂なものだといわざるをえません。なぜなら、仮定により、(i) Σ_1 , Σ_2 は真に寝椅子であるところのものですから、(1)により、それらはそれら自身が寝椅子であります。したがってまた、(3)により、 Σ_1 , Σ_2 はそれらの寝椅子の相を他の何かからもらってもっているではありません。したがって(4)により $\Sigma_1 = \Sigma_2$ であらざるをえません。ところが他方では、(ii) Σ_1 , Σ_2 は寝椅子なのですから(2)により、 Σ_1 , Σ_2 は何か他のものから、その他のものを Σ とすれば、 Σ から、その寝椅子の相をもらってもっているのではありません。そしてこの Σ こそ(4)により、真に寝椅子のアイデアである唯一のものなのですから、この場合 $\Sigma \neq \Sigma_1$ かつ $\Sigma \neq \Sigma_2$ かつ $\Sigma_1 \neq \Sigma_2$ です。この(ii)の結論の連言肢のひとつ $\Sigma_1 \neq \Sigma_2$ を分離させて（これはもちろん合法的です）

(i)の結論との連言を作り、(i)と(ii)に共通の仮定「真に寝椅子であるところのものはそれ自体寝椅子である」との条件文を作るならば、

真に寝椅子であるところのものはそれ自体寝椅子である→矛盾

が導かれます。すなわちこのことはこの条件文の前件、すなわち「真に寝椅子であるところのものはそれ自体寝椅子である」が偽であるという帰結を必然とするのです。

ディオクレス いやどうも私には、だんだんと疑わしくなってきました。プラトンが実際にそのような明白な誤りを犯したのだろうか、と。なかんづく問題なのは、プラトンが本当に認めたかどうかわからないⅢの仮定、すなわち「*F*のアイデアは*F*である」を、私たちすべてがプラトンの議論のうちに読みこんだうえで、それを再構成しようとしている点です。しかし、はたしてⅢを仮定することなしにはプラトンの議論を解釈できないものでしょうか。考えてみたいのは、私たちすべてがプラトンを誤解している可能性がないかどうかということです。というのも、なにしろあのようにも短い言葉のなかに、おおバッケイオスとエイロネイアスよ、きみたちが見てとったような精緻かつ詳細で明白な矛盾を読みとることができるのならば、次のような可能性を考えてみることで、ひょっとしたら、理に合わないことではないのではないかと、私には思われるのです。すなわち、プラトンは二つの寝椅子のアイデアを口にのぼしたとたんに、それらはアイデアではないという結論に移行し、すぐさまそれらがそのものを分有するはずの唯一の寝椅子のアイデアへ話を移したのだといった可能性が。すなわち、プラトンにとっては二つの寝椅子のアイデアが存在しえないということは、なにか長々しい証明を付して公言するほどのたいそうなことでもなんでもなく、また、グラウコーンでしたかソクラテスの問答相手は？そう、そのグラウコーンにとってもそういう事情だったのだと考えられるのではないのでしょうか。

エイロネイアス しかし寝椅子のアイデアが二つ以上存在しないことを証明するのは、省略してしまってもいいと考えられるほど簡単なことでしょうか。

ディオクレス ええ、困難なことではないと思います。それに、その証明にはⅢの仮定はいらないと思うのです。

バッケイオス ほほう、そんなことができるだろうか？

ディオクレス では、まあやってみましょう。しかし私としては先にゲンナイオス君が与えてくれた諸前提の解釈に少しばかり手を加えて、そのうえで、さらに記号を導入したいと思うのです。これはまあ私の好みにすぎないかもしれませんが、⁽⁸⁾

さて、まずあのⅠ-1およびⅠ-2をとりおさえておきましょう。そこで、「 ϕ は個々のものが F であることの範型アイデアである」あるいはもっと簡単に「 ϕ は範型アイデアとして F を規定する」を“ $\Pi(\phi, F)$ ”と表現してよいことにしましょう。ただしここで ϕ はアイデア変項だとします。アイデア変項として使用されるのは、適宜ギリシア小文字 ϕ, ψ, \dots ; ϕ_1, ϕ_2, \dots ; ψ_1, ψ_2, \dots のようなものとしましょう。 F は束縛変項としては用いません。それは特定の相（これを私は特質・属性・性質と解します）をあらわす抽象名詞的・形容詞的表現の置き換えのみを許す図式文字だとします。 F 以外には G だとか H だとかが併用できることにしておきましょう。それから、Ⅰ-3があるのですが、これはほとんど必要ないでしょう。アイデア変項への代入を行なうには、 Φ, Ψ といったギリシア大文字を用いることができるとしておきましょう。

論理演算子としては、さしあたって次のものを認めておけばよいでしょう：すなわち、 \neg （否定）、 \wedge （連言）、 \vee （選言）、 \rightarrow （含意）、 \forall （全称量記号）、 \exists （存在量記号）、 $=$ （同一）、 \equiv （同値）、 \in （帰属）、 \perp （矛盾）これらのふるまいおよび意味づけはふつう人々がそれらに与えているとおりにしましょう。

(8) アイデア論を形式化する試みとしては、前掲ヴェドベリの書物、とりわけ日本語版の序文を参照。以下のディオクレスの形式化は、その多くをヴェドベリに負っている。

また、式(*wff*) についてのこまごました約束は同意ずみのものとしましょう。
さらに、 v, w をメタ論理の変項として、

$$v \neq w = \neg (v = w)$$

$$v \notin w = \neg (v \in w)$$

によって \neq および \notin の定義としましょう。また、陽表的に認められる推論規則は分離規則 (*m.p.*) とし、命題論理の定理はすべて、ただ **T** としてのみ言及されてよいことにしましょう。

すると、**I-1** および **I-2** は次のように表現できます。

$$\mathbf{I-1} \quad \exists \phi \Pi(\phi, F)$$

$$\mathbf{I-2} \quad \forall \phi \forall \psi \{ [\Pi(\phi, F) \wedge \Pi(\psi, F)] \rightarrow \phi = \psi \}$$

もしプラトンがこれら **I-1** および **I-2** からアイデアの唯一性を得ようとしたなら、彼はただちに次の系を、すなわち **I-1** と **I-2** との連言：

$$\text{系1a} \quad \exists \phi \Pi(\phi, F) \wedge \forall \phi \forall \psi \{ [\Pi(\phi, F) \wedge \Pi(\psi, F)] \rightarrow \phi = \psi \}$$

を、あるいはこれの別形

$$\text{系1b} \quad \exists \phi \{ \Pi(\phi, F) \wedge \forall \psi [\Pi(\psi, F) \rightarrow \phi = \psi] \}$$

を用いたことでしょう。しかし彼はそうせずに、 F の範型アイデアは二つ以上存在しないと言うことを選んだのです。

さて、その証明は次のとおりです。

F の範型アイデア ϕ, ψ が存在し、 $\phi \neq \psi$ である。すなわち

$$\exists \phi \exists \psi [(\Pi(\phi, F) \wedge \Pi(\psi, F)) \wedge \phi \neq \psi]$$

だと仮定する。しかしこの仮定は不条理である。

〔証明〕

- {1} 1 $\exists \phi \exists \psi [(\Pi(\phi, F) \wedge \Pi(\psi, F)) \wedge \phi \neq \psi]$
- {1} 2 $(\Pi(\phi, F) \wedge \Pi(\psi, F)) \wedge \phi \neq \psi \dots \dots \phi, \psi, 1, E\wedge$
- {1} 3 $\Pi(\phi, F) \wedge \Pi(\psi, F) \dots \dots 2, T$
- {1} 4 $(\Pi(\phi, F) \wedge \Pi(\psi, F)) \rightarrow \phi = \psi \dots \dots 3, I-2$
- {1} 5 $\phi = \psi \dots \dots 3, 4, m.p.$
- {1} 6 $\phi \neq \psi \dots \dots 2, T$
- {1} 7 $\phi = \psi \wedge \phi \neq \psi \dots \dots 5, 6, T$
- {1} 8 $(\Pi(\phi, F) \wedge \Pi(\psi, F)) \rightarrow (\phi = \psi \wedge \phi \neq \psi) \dots \dots 3, 7, T$
- {1} 9 $(\Pi(\phi, F) \wedge \Pi(\psi, F)) \rightarrow \text{人} \dots \dots 8, T$
- {1} 10 $\neg \exists \phi \exists \psi [(\Pi(\phi, F) \wedge \Pi(\psi, F)) \wedge \phi \neq \psi] \dots \dots 9, T$

上の 10 が証明されなければならないことでした。ところが、お気づきのよう
に、この 10 は私たちの 1-2 にほかならないのです。すなわち、上のような
証明は、まったくもって冗戯に類いするものだったのです。いま

$$\neg \exists \phi \exists \psi [(\Pi(\phi, F) \wedge \Pi(\psi, F)) \wedge \phi \neq \psi]$$

を、ド・モルガンの法則と二重否定の法則を用いて変形しますと

$$\forall \phi \forall \psi [\neg (\Pi(\phi, F) \wedge \Pi(\psi, F)) \vee \phi = \psi]$$

が得られるわけですが、これはさらに、命題論理の定理 “ $\neg p \vee q \equiv p \rightarrow q$ ” によ

り、**I-2**にはかならないところの

$$\forall \phi \forall \psi [(\Pi(\phi, F) \wedge \Pi(\psi, F)) \rightarrow \phi = \psi]$$

に変形されるのです。

つまり、いま先ほど与えられた証明というのは、まったくもってなんのことはない“**I-2**→**I-2**”と言っているにすぎないのです。ところで、このようにも簡単でしかも自明な事柄を、自身**I-2**をはっきりと述べておりながら、プラトンが自覚しもしなかったなどとは私には信じられないのでして、むしろ私は、彼はそれをあまりに自明なのでことさらしく述べるのを差し控えたのではないかと考えてみたいのです。そのように考えますと私たちがいまつきあたっている問題をいちばん無理なく解決できるように思えるのです。つまり、プラトンは“εἰ δύο μόνας ποιήσεται”と仮定したときすでに、**10**を明白このうえないものと見て取って、すぐさまそうした二つのアイデアは**F**のアイデアではないと断定したのです〔1〕。そしてそれらがアイデアでないならそれらは個物にすぎないのであって、**II-1**により、それら両者が「今度はまた」(ἀν) その相をもつことになるひとつのもの(μία)が「ふたたび」(πάλιν) 現われてくるだろう(ἄν ἀναφανείη)としたのです〔2〕。注目すべきなのは、この場合に、〔1〕から〔2〕への移行にあたって、“〔1〕(公理**I-2**を前提)⇒**III**⇒〔2〕(公理**II-1**を前提)”という経路がとられていないということです。**III**は不必要なのです。

さて、以上が、あの議論に対する私の所見であります。ゲンナイオス君の与えた**II-1**、**II-2**に関して、それらを私がどのように見ているかをこの機会に述べさせていただきたいと思います。

II-1および**II-2**を厳密に定式化しようとするとき、はげしく突きあたってくるひとつの問題があります。それは、「 x は**F**という相をもつ」といったプラトンの表現をどのように解釈すべきかということにかかわる問題です。「 x は

F という相をもつ ($\epsilon\chi\epsilon\iota$)」とか「 F という相が x に内在する ($\epsilon\lambda\epsilon\sigma\tau\iota$)」とかのノーマルなプラトンの表現を、ただたんに表現上の問題として、すなわち存在論的解釈にはかかわることなしに、「 x は F である」と同値のものとみなすならば、そうしたことは、それだけのものとしては決してミス・リーディングではありません。しかし、その場合の「 x は F である」($\tau\acute{o}\ x\ \epsilon\sigma\tau\iota\ F$)の含む $\ll F \gg$ を「述語」と解し、 \ll である \gg ($\epsilon\sigma\tau\iota$)をコプラと解するならば、その場合の「 x は F である」はプラトンのイデア論体系にこれを根本から歪曲しかねない存在論的解釈を導入する恐れがあるのです。世界が、プラトンにとって、原子のように堅い無数の感覚物から成っているようなものだったとすれば、そうした感覚物、そうした x を根本に据えて、世界が現わす質的多様性を説明する或る方式が採用されてよかったでしょう。その場合には、 \ll 存在するとは変項の値であること \gg (クワイン) という周知の唯名論的公式がプラトンのイデアを裁く法文として採用されてよかったことになるでしょう。⁽⁹⁾ しかしいずれにしても、そのようなことはすべて、プラトンのイデア論体系には無縁なことです。以前にゲンナイオス君も触れていたように、プラトンにとっては、この現実世界は薄明の世界、流動する世界、それ自身では存在の根拠をもたない世界なのです。「 x は F である」と言われるとき、その x は、この壮麗にして美しい宇宙という構築物がその上に打ち樹てられるところの堅固な岩盤ないし素材といったものではないのです。むしろそれは、イデアを分有しイデアの写像であることによって、かろうじて存在にすがりつくことのできるものなのです。たしかにここにはむづかしい問題があります。 \ll 分有 \gg ($\mu\epsilon\theta\epsilon\chi\epsilon\iota$)ということについて語るならば、何が何を分有するのかという問は不可避です。しかしいまもみましたように、分有主体たるその \ll 何が \gg は、アリストテ

(9) クワインのプラトン・アレルギーについては、たとえばQuine, 'On Universals', *Journal of Symbolic Logic*, September 1947. なお普遍者についての異なった反応例として、たとえば G. J. Warnock, 'Metaphysics in Logic', *Essays in Conceptual Analysis*, Antony Flew (ed.) 1957, pp.75—93.

レスの実体といったものでは決してないのです。「 x は ϕ を分有する」といわれるとき、その x は、たとえば比喻を使っていうならば、いかなる社会的規範にも制約されない立場にある独立男子が同様の立場にある女子を娶るといった場合のその独立男子のようなものではないのです。むしろこの場合の x は、女子の周流・交換によってリネージ全体が厳密に結びつきあっている部族社会の中の一つのリネージに所属する若者のような立場にあるのです。⁽¹⁰⁾ そうした若者の主体性とみられるものは、実のところ、部族社会の構造およびリネージ間の序列、それらを支配する種々の社会的カテゴリーによって完全に規定されたものなのです。実在的なのは構造であって、この構造のあれやこれやの場所に位置を占める個物ではありません。このような比喩的な言いまわしによって、はたして私がプラトン哲学の体系内における個物の位置についてなにほどのことが伝えられえたのかはわかりません。ですが、ゲンナイオス君は、巧い逃れ道を考えたものです。というのも彼は「 x は F という相をもつ」の記号表現として、先の発言のなかで、あたかもこれが通常の述語表現ではないことを匂わせるかのように、「 F/x 」というふうに定式化したのですから。問題はしかし記号の表現の仕方のレベルにあるのではないことは明らかです。どういう記号表現を採用するかは、しばしば任意のことです。要はそれに与える意味づけにあるのです。

さて、率直に申しまして、私は、「 x は F である」に該当するプラトンの言明のかずかずを取り押えるすべをもたないのです。そこでここでは、いま申し述べたような諸事情があることを承知のうえで、述語論理の枠組内でそうした言明を処理できないかどうか試みてみようと思うのです。そうした試みがもたらすかもしれないプラトン哲学の歪曲化は、それを注意深く見守ることによって、より精確なプラトン理解へと歩みを進めるためのやむをえない犠牲となりうるかもしれないのです。

(10) cf. Marshall D. Sahlins, *Tribesmen*, Prentice-Hall, 1968 (邦訳 青木保訳『部族民』鹿島出版会) IV章など参照。

「 x はひとつの F である」を“ $F(x)$ ”として、「 x は ϕ を分有する」あるいは「 x は ϕ の写像である」を“ $M(x, \phi)$ ”という記号表現で置きかえられてよいことにしましょう。プラトンはしばしば

x はひとつの F である \equiv x は ϕ を分有する

といった趣旨の発言をしています。(11) しかしそうした事態は、もしも ϕ と F との間になんらかの必然的関係が成り立っているのではないとするならば、理解できないことです。 ϕ と F との間のそうした関係を表わすものとして、私たちはすでにI-1とI-2とを定式化したのでした。いま必要なのは、 ϕ と F とのそうした関係をいっそう緊密に言い表わすことです。ところで、系1a, 系1bによれば、 $\Pi(\phi, F)$ を満足するようなアイデアはたった一つしか存在しなかったのです。そこで、私たちはそうした唯一のアイデアを簡便に表わすため

定義1 $\iota(F) = \Pi(\phi, F)$ を満足するアイデア ϕ

としましょう。するとそうしたアイデア $\iota(F)$ によるI-1の存在例化は私たちに

系2 $\Pi(\iota(F), F)$

を与えます。

さて、“ $M(x, \phi)$ ”といった表現と“ $F(x)$ ”といった表現とが言い表わす内容はどのように関連づけられるでしょうか。明らかに、「範型アイデア ϕ が F

(11) cf. *Phaed.* 102B ; *Parm.* 128E—129A et alit. cf also H. Yamakawa, 'On the Notion of "Participation in Plato's Theory of Ideas,—Review of A. Wedberg's "The author's preface to japanese edition" (1975) to his *Plato's Philosophy of Mathematics*, Stockholm, 1955. (『阪南論集』第11巻第4号, 1976)

を規定するとき、 x は ϕ を分有し、そしてそのことは x が F であるということと同値である」が成り立つと思われます。次の式がこの事態を表現するでしょう：

$$\text{II} \quad \forall \phi \{ \text{II}(\phi, F) \rightarrow \forall x [F(x) \equiv M(x, \phi)] \}.$$

さて、この式の冠頭 $\forall \phi$ をその作用域の 前件と後件 にふりわけ、前件の冠頭を除去することにより、われわれは

$$\text{II}(\iota(F), F) \rightarrow \forall \phi \forall x [F(x) \equiv M(x, \phi)]$$

を得ます。この式と系2 は、*m.p.*により

$$\text{II-1} \quad \forall \phi \forall x [F(x) \equiv M(x, \phi)]$$

を与えるのです。ところで、II-2 は「 ϕ を分有するいかなる x も ϕ ではない」(あるいは「 ϕ の写像であるいかなる x も ϕ ではない」)と主張するものでした。これは

$$\text{II-2} \quad \forall \phi \forall x [M(x, \phi) \rightarrow x \neq \phi]$$

と表現できます。

さて、これで、おおゲンナイオスよ、きみがプラトンの諸公理だとして先に提示したものの、不十分ながら、記号表現が完成したわけです。ところでバッケイオス君、きみがこのII-2からの必然的帰結だとしたものをも、ことのついでに導き出しておきましょう。II-2の含む x に ϕ を置き換えてみましょう。すると、

$$(i) \quad \forall \phi [M(\phi, \phi) \rightarrow \phi \neq \phi]$$

です。また、II-1により $F(x)$ と $M(x, \phi)$ は同値です。そこでもし仮りに $F(\iota(F))$ が成り立つようなら、II-2により、

$$(ii) \quad F(\iota(F)) \rightarrow \iota(F) \neq \iota(F)$$

が成り立つはずですが。しかし(i), (ii)いずれも不条理です。ゆえに

$$\text{系3a} \quad \forall \phi \rightarrow M(\phi, \phi)$$

$$\text{系3b} \quad \neg F(\iota(F))$$

です。ところで、最後に付け加えさせていただきますが、ゲンナイオスに対してバツケイオス君が言い立てた *petitio principii* は、ゲンナイオスそしてプラトンが、上の系3bが禁ずるはずの

$$\text{III} \quad F(\iota(F))$$

というややグロテスクな原理を暗黙のうちに使用したということに関するものなのです。

IV

アリスタゴラス どうしたのだねエイロネイアス？ さきほどからくすくす笑いが止まらないようだが？ いや、なにか言いたいことがあるのなら遠慮なく言えばよかろうに。

エイロネイアス ああ、アリスタゴラス、それにディオクレス。どうか悪く取らないで下さい。ただ、ぼくはディオクレスがさきほどの話の中で感覚的個物を部族社会の未婚男子に喩えたのにすっかり感心しましてね。ところがそれとともに、突然、ある大学の司書の困惑した顔を思いだしまして、それからもう

なぜかひとりでにおかしくなって、どうしても笑いが止まらなくなってしまうという次第なのです。

アリスタゴラス 司書だって？

エイロネイアス ええ、いや、すっかりお話しいたしましょう。ぼくがディオクレスの述べた考えをどう思っているか、そしてなぜそれが司書などという突拍子もないと思われるものに結びつくのかを。

プラトンが『パルメニデス』132A1—B2においてみずからのアイデア論に対して加えた批判は、意味論的パラドックスの一種だと考えられるのではないのでしょうか。

次のような場合を考えてみて下さい。(12) ある大学の図書館の司書殿がその図書館所蔵のすべての蔵書名を記載した蔵書目録を作る計画を立てたとするのです。司書はさっそく蔵書名をリスト・アップすることにとりかかったのです。そして仕事は無事完了し、立派な蔵書目録が一冊でき上がりました。しかし、そこで、この哀れな司書殿は奇妙なことに気づいたのです。その蔵書目録には、計画によれば、図書館所蔵のすべての蔵書名が洩れなく記載されていなければなりません。ところが、この司書殿が作製した蔵書目録には、その蔵書目録以外のすべての蔵書名は洩れなく記載されてあったのですが、それ自身の書名（たとえば『……大学所蔵蔵書目録』といった書名）は記載されていなかったのです。しかし、その蔵書目録自身も図書館所蔵の蔵書なのです。しかし計画によれば、すべての蔵書名が記載されていなければならないのです。そこでこの司書殿の取った第一の方策は、そうやってでき上がった蔵書目録の書名をも記載したもう一冊の蔵書目録（ただしこの目録にはこの目録自身の書名は記

(12) 以下の意味論的パラドックスの事例は、Hans Reichenbach, *Elements of Symbolic Logic*, Free Press Paperback Edition, 1966, pp. 220—222 のヴァリエーションである。ちなみに、この Reichenbach の書物は論理実証主義のサークルにあっては、めずらしく日常言語の分析に意欲をもったものであって、その明晰さとともに、今日的意義をなおかつ十分に有するものであると思われる

載されてありません）を作ることでした。しかしそういった方策を取ることは——司書自身やがて気づいたのですが——具合の悪いことです。そういった方策に従うことは無限に多くの（自身の書名以外のすべての蔵書名を記載した）蔵書目録を作ることの意味するからです。このことに気づいた司書殿は第二の方策を立てました。この第二の方策とは、計画された蔵書目録自身の書名を記載した蔵書目録を作ることです。このことはわけないことのようにみえます。それ自身以外のすべての蔵書名のいちばん後にその蔵書目録自身の書名を書きこんでおけばよいのですから。

第二の方策にすっかり満足した司書殿はもうこれで万事落着くと思ひこんでいたのです。ところが彼は或る方面からいう頭の痛くなる仕事を依頼されたのです。その依頼というのは、この大学が所在する都市のあちこちにある各種図書館が発行している蔵書目録には「その蔵書目録自身の書名を記載している蔵書目録」と「それ自身以外のすべての蔵書名を記載している蔵書目録」とがあるのだが、このうちの後者全部の蔵書目録、すなわち「それ自身以外のすべての蔵書名を記載してある蔵書目録の蔵書目録」を作製してもらいたいというものであったのです。この依頼を受けたその司書殿は、その依頼された蔵書目録を、それ自身の書名を記載したものとして作るべきなのか、それとも記載しないものとして作るべきなのか、今度はまったく途方に暮れてしまったわけです。というのも、(1)もし彼がそれをそれ自身の書名を記載したものとして作るなら、それはそれ自身の書名を記載した蔵書目録であり、それゆえ依頼された蔵書目録すなわち自身の書名を記載しないすべての蔵書目録の蔵書目録ではないということになるし、かといってまた(2)もし彼がそれを自身の書名を記載しないものとして作るなら、それはそれ自身の書名を記載しない蔵書目録であり、それゆえ、依頼された趣旨により、その蔵書目録に記載さるべきだということになるからです。

『パルメニデス』123A1—B2におけるいわゆる第三人間論 (*TMA*) がこうした意味論的パラドックスとパラレルな関係にあることは明らかです。そして

実際その議論は、いまさきほどの哀れな司書殿が最初に立てた第一の方策とはほとんど同趣旨のものです。TMA が言おうとするのは、《一定の特質を共有するすべてのものはその特質に対応するひとつのアイデアを分有することによってその特質を共有し、その場合、そのアイデアそのものはその特質を共有するすべてのもののうちのひとつではない。しかるに当のアイデアそのものがその特質をもつ。すなわち、当のアイデアはその特質を共有するすべてのもののうちに入らないのでもあるし入るのでもある。もしこの矛盾した主張が認められるならば、ひとつの特質に対して無限に多くのアイデアが存在することになるであろう。それゆえに、ひとつの特質にひとつのアイデアに対応するという君（ソクラテス）の仮定は却下される》⁽¹³⁾ であると要約しうるであります。さて、この場合のアイデアは、あの《それ自身以外のすべての蔵書名を洩れなく記載してある蔵書目録》に相当するものです。それはそれに対応する特質を共有するすべてのもののうちには入らないからです。しかしそれはまた、あの蔵書目録自身が大学図書館の蔵書であったように、それを分有することによってそれに対応する特質を共有するすべてのものに属する一メンバーなのです。

すべてということにからむこうした self-referent な意味論的パラドックスが、階型理論とアナログな関係にある言語レベルの理論によって解決されるものであることは今日ではよく知られています。その理論によれば、われわれは、ひとつの言語内においてその言語について語ることは許されないのです。蔵書目録は書名を集めたものであるわけですが、もしこの蔵書目録がそれ自身の書名を収録するならば、それはそれ自身について語ることになり、言語レベルの理論を犯すことになるのです。換言するならば、そこに収録された自身の書名は他の書名が語られている言語レベルよりは一段高いメタ言語に属するものだというわけです。

(13) 拙稿「G. Vlastos と第三人間論」(桃山学院大学人文科学研究第11巻第1号) 参照。

それにしてもプラトンがそうした意味論的パラドックスをはっきりと自覚し解決する方法を知っていたとはぼくには思われません。こうして、ディオクレスがグロテスクだと言おうが言うまいが、 F のアイデアは F でなければならぬ($F(\iota(F))$)とプラトンは考えたにちがいないのです。現代のソフィスティケートされた論理学者たちにとっては、自己自身のメンバーであるクラスとか自己自身について言及する名前について語ることは、たんに《無意味》なことを語るにすぎません。しかし、明らかにプラトンは、たとえば美のアイデアは美しいか美しくないかのどちらかだと考えたのです。すなわち F のアイデアはそれ自身 F であるか $\neg F$ であるかのいずれかでなければならなかったのです。そして、 F のアイデアが F でないというようなことは彼にとっては考えようもないことだったのです。実際、『プロタゴラス』330C—Dにおいてソクラテスは、誰かが敬虔そのものは敬虔でないなどと主張しうるという考えに憤慨して、「もし敬虔が敬虔でないとすれば、いったい他の何が敬虔でありうるであろうか」と言っているのです。このようなプラトンの考えからすれば、ディオクレスの定式化したⅢはまちがいになくアイデア論の真正の仮定だとみなされうるのです。このⅢの仮定と系3bとの連言は F のアイデアが F であるとともに F でないという不条理な帰結をもたらすでしょうが、そうした不条理を解決する手段をプラトンが有していたとは思われません。

さて、ディオクレスの先ほどの発言の含意するものは、Ⅲの仮定を用いることなしに寝椅子の二つのアイデアが存在しないことが証明される以上『国家』の当該箇所でのプラトンの議論はTMAの反証根拠たりうるのではないかと、いうことであろうと思われます。というのも、そのようにして確立された「 F に対応する二つのアイデアは存在しない」という命題とⅠ-1との連言は、ただちに系1aあるいは系1bのかたちでの F に対応する唯一のアイデアの存在を確証すると思われるからであります。ディオクレスは、おそらく、Ⅲの仮定を疑問視し、ⅠおよびⅡ群に属する諸仮定のみが整合的なアイデア論体系をかたちづくるのだと考えられるのでしょう。しかし、ぼくはといえば、まず第一に、Ⅲの仮

定をプラトンの真正の仮定だとする点において、第二に、たとえⅢの仮定を除いたとしてもⅠおよびⅡ群に属する諸仮定がかならずしも満足のゆくものではないとする点において、ディオクレスとは異なった考えをもっております。

まず第一に、Ⅲの仮定を認める場合、 F のアイデアが唯一であろうがあるまいが **TMA** はアイデア論に対する妥当な批判となります。ディオクレスの定式化した記号表現の仕方に従うなら、**TMA** はおそろくなにか次のような式によって表現されてよいことになるでしょう。

いま、そのすべてのメンバーが F であるところのひとつのクラス y が存在し、 x が y のメンバーであることと x が F であることが同値であるとするならば

$$1. \quad \exists y \forall x ((x \in y \equiv F(x)) \rightarrow \exists \phi ((x \in y \equiv M(x, \phi)) \wedge \phi \notin y \wedge \phi = \iota(F) \wedge \forall \psi (x \in y \equiv M(x, \psi))) \rightarrow \phi = \psi))$$

が成り立ちます。これは、 F に対応するアイデアが唯一であるとした場合の *Parm.* 132A1—4の “ $T\acute{\iota}$ δ' αὐτὸ τὸ μέγα καὶ τᾶλλα τὰ μεγάλα, ἐὰν ὡσαύτως $\tau\eta\psi\upsilon\chi\eta\eta$ ἐπὶ πάντα ἴδῃς, οὐχὶ ἐν $\tau\iota$ αὖ μεγάλα φανεῖται, $\tilde{\phi}$ ταῦτα πάντα μεγάλα φαίνεσθαι” に対する解釈でありまして、《ひとつのクラス y が存在し、すべての x について、 x はそれが F であるときかつそのときにのみ y のメンバーであるとするならば、ひとつのアイデア ϕ が存在し、すべての x について、 x はそれが ϕ を分有するときかつそのときにのみ y のメンバーであり、 ϕ は y のメンバーでなく、 ϕ は $\iota(F)$ であり、すべての ψ について、 x はそれが ψ を分有するときかつそのときにのみ y のメンバーであるとするならば $\phi = \psi$ である》と読まれます。ところがしかし、そのような唯一のアイデア $\iota(F)$ そのものが F です。すなわち

2. $F(\iota(F))$

であります。さて、この二つの前提 1 と 2 は、唯一であるはずの $\iota(F)$ のひとつの無限系列を与えるのです。

いま y_1 を 1 の適用されるクラスだとしよう。すると、 y_1 のすべてのメンバーがそれを分有するところの唯一のアイデア ϕ_1 が存在し、 ϕ_1 は y_1 のメンバーでなく、 $\phi_1 = \iota(F)$ です。しかし、2 により ϕ_1 は F であります。そこで、 ϕ_1 をその新たなメンバーとする新しいクラス $y_2 = y_1 \cup \{\phi_1\}$ が存在しなければなりません。1 により、 y_1 のすべてのメンバーがそれを分有するところの唯一のアイデア ϕ_2 が存在しなければなりません。そして ϕ_2 は y_2 のメンバーでなく、かつ $\phi_2 = \iota(F)$ といったアイデアです。しかし、2 により ϕ_2 もまた F です。そこで ϕ_2 をその新たなメンバーとする新しいクラス $y_3 = y_2 \cup \{\phi_2\}$ が存在しなければなりません。以下同様。このようにして、そのすべてが $\iota(F)$ であるところのアイデアのひとつの無限系列 $\phi_1, \phi_2, \phi_3, \dots$ が存在することになります。

さて、このようにして再現された **TMA** は、先にバツケイオス君が再現してみせた *Rep. 597C1—D3* とほとんどまったく同じものであります。かくして、バツケイオス君の議論とぼくの議論は、相提携して、一つの円環を閉じさせたのであります。一方は寝椅子論議から第三人間を出現させ、他方は第三人間から寝椅子論議を無効なものと宣することにより。

さて、次に III の仮定、すなわち「 F のアイデアは F である」という仮定はプラトンの真正の仮定ではないと、まあ考えてみましょう。それでもなおかつごたごたごたが払拭できてしまうというわけではないのです。**TMA** の前提であるとして定式化された 1 の前件をとりあげてみましょう：(14)

$$\exists y \forall x (x \in y \equiv F(x)).$$

この式は、《与えられた条件 F を満足するものはすべて、しかもそれらのみ

が、そのもののメンバーであるようなひとつのクラス y が存在する \gg と読まれます。すでにお分りのように、これからただちに、ラッセルが示したような素朴集合論のパラドックスが導かれます。任意の条件として、いま“ $x \notin x$ ”を選ぶならば

$$\exists y \forall x (x \in y \equiv x \notin x)$$

- (14) 以下におけるエイロネイアスの**TMA**の第一前提の取扱い是不正である。“ F ”として任意の条件を与えてよいといった言質は諸対話篇にはみあたらない。ディオクレスの与えたようなアイデア論解釈においても“ F ”は「抽象名詞的・形容詞的表現の置き換えのみを許す図式文字」として使用されている。この言い方が或る程度漠然としていることはたしかである。しかし、ふつうにプラトンがこの場合の“ F ”に相当するものとして考えているのが「名」($\delta\upsilon\omicron\mu\alpha$)であって、任意の条件を規定する文なのではないということは明らかである。エイロネイアスの意図は、**TMA**の第一前提とパラドックスを生じさせる型をもった分出公理のようなものを重ね合わせようとするところにある。“ $x \in x$ ”とか“ $x \notin x$ ”といった文をこの場合の“ F ”に読みこんでよいとすれば、明らかにパラドックスが生ずる。しかし、エイロネイアスの言に反して、その場合には、そのパラドックスは、実際には、実質的に**III**の仮定を前提しているのである。たとえば、いまもし仮りに“ $x \in x$ ”を「 x は x である」(ただし、この場合の“ある”はコプラ)と読むならば、これはプラトンの語法においては「 x は x を分有する」と同義となろう。すなわち、“ $x \in x \equiv M(x, x)$ ”であろう。すると、**II-2**により、「 $x \in x$ ならば $x \neq x$ 」である。したがって“ $x \notin x$ ”である。“ $x \in x$ ”から“ $x \notin x$ ”が帰結するわけである。しかし、このような帰結は「 x は x を分有する」といった語法、したがってまた**III**のような語法を許容するところから生ずるのである。エイロネイアスは**III**なしにもごたごたごとがあるというが、これは正しくないのである。

いったい、素朴集合論のパラドックスにおいては、無造作に「論議世界」を仮定することからいろいろなアポリアが生じたのであるが、そのような「論議世界」に相当するものがプラトンにあったか否か、あったとしてもそれがいかなるものであったかということ自体が問題なのである。さらにまた、分出公理そのものは、明らかに集合といえるものをもってこれを適用するならば、ラッセルのパラドックスを排除しうるものである。(cf. P. Suppes, *Axiomatic Set Theory*, van Nostrand, Princeton, N. J., 1960, p.7)

です。この式が与えるクラスを M とすれば

$$\forall x (x \in M \equiv x \notin x)$$

となります。次に、変項 x に M を代入することにより冠頭を除去するならば

$$M \in M \equiv M \notin M$$

が導かれます。これは矛盾式です。

このような結果はなんら恐れるには当たらないと考えられる人もあるかもしれませんが。というのは、上の結果によってたとえ **TMA** の前件が偽となるとしても、前件が偽である条件文は恒真であるから、とその人は言うかもしれませんが。**TMA** の前提 1 に関するかぎり、その議論は有効です。ですが、大局的に見るなら、そうした意見はミス・リーディングです。**TMA** の前提 1 がそこから導かれたわれわれの基本的仮定：

$$\text{II} \quad \forall \phi \{ \Pi(\phi, F) \rightarrow \forall x [F(x) \equiv M(x, \phi)] \}$$

に帰ってみましょう。この仮定からは、当然ながら

$$(i) \quad \Pi(\iota(F), F) \rightarrow \forall x [F(x) \equiv M(x, \iota(F))]$$

が導かれ得ます。さて、私たちの議論の趣旨からすれば、この (i) を

$$(ii) \quad \Pi(\iota(F), F) \rightarrow \exists y \forall x [x \in y \equiv F(x) \equiv M(x, \iota(F))]$$

のように書き直し、これをさらに

$$(iii) \quad \neg \Pi(\iota(F), F) \vee \exists y \forall x [x \in y \equiv F(x) \equiv M(x, \iota(F))]$$

のように変形することはきわめて合法的なことであるはずですが．ところで， Π は私たちの基本的仮定なのでですから真であるべきです．もしそれが真でないようなら，私たちのいままでの議論は，そもそもの当初からすべてまちがっていたこととなります． Π は真です．すると (iii) もまた真です．すると，(iii) の選言肢のうち少くとも一方が真でなければなりません．ところが選言肢の一方 “ $\exists y \forall x [x \in y \equiv F(x) \equiv M(x, \iota(F))]$ ” は偽でありえます．したがって “ $\neg \Pi(\iota(F), F)$ ” が真でなければなりません．したがって，必然的に “ $\Pi(\iota(F), F)$ ” は偽でなければなりません．それゆえにまた必然的に，われわれの

$$I-1 \quad \exists \phi \Pi(\phi, F)$$

は偽なのです．それゆえにまた

$$I-2 \quad \forall \phi \forall \psi \{[\Pi(\phi, F) \wedge \Pi(\psi, F) \rightarrow \phi = \psi]\}$$

ということも成り立たないのです．それゆえに，おおディオクレスよ，**I-2** を用いての F に対応する二つのアイデアが存在しないことのあなたの証明も成り立たないのです．

〔補注1〕 ロスは、周知のとおり、『国家』の当該箇所におけるプラトンの議論が **TMA** の反証とはならぬことを、次のような言葉で表現した：

“To show that if there were two Ideas of bed there would have to be a third does nothing to disprove the contention that *if there is one Idea of bed, related to particulars as Plato supposes, there must be a second*” (p. 87,

イタリック筆者)。

さらにまた、次のようにも言っている：

“Though from the *Symposium* onwards Plato begins to use, from time to time, the language of transcendence, and though it is omnipresent in the *Tmaeus*, he nowhere answers, or tries to answer, the ‘thirdman’ objection which he makes in the *Parmenides* to the transcendentalist view. It is sometimes said that he had already answered it himself by the use he makes in the *Republic* of another infinite regress argument to prove that there cannot be two Ideas of bed. But this is a mistake; to show that the existence of two Ideas of bed would involve the existence of a third Idea behind them has no tendency to show that the existence of an Idea and of a particular resembling it does not involve another Idea behind both.”
(pp. 230—231, イタリック筆者)

ロスの議論を単純化することを試みてみよう。すると、そのひとつの試みは、以下のようになるかもしれない。いま寝椅子のアイデア B' , B'' があるとせよ。すると『国家』の議論は次のようになる：

R B' , B'' が在るならば B''' が在る。

また、寝椅子のアイデア B' に類似する個物 b があるとせよ。すると『パルメニデス』の議論は次のようになる：

P b , B' が在るならば B'' が在る。

このとき、ロスによれば、われわれは R と P について次のように言うことはできない。すなわち：

(i) “ R ” ならば “ $\rightarrow P$ ”

と言うことはできない。すなわち、 R を証明することは $\rightarrow P$ を証明することにはならない。

これは奇妙な論理だと言わなければならない。いま、 R と P とに共通な型を取り出し、いみよう。それは当然ながら次のようなものになるであろう：

(ii) x , y が在るならば z が在る。

さて、もちろんわれわれは

(iii) “(ii)” ならば “(ii)” ではない

というようなことを主張することはできない。すると、 R と P との関係は (ii) と (ii) との関係と同じものではない。それら二つの関係を同一のものにしている要因はどこにあるか。それは R における B' と P における b との相違にすぎないであろう。そしてそれは結局アイデアと個物との相違である。ではロスは、 R と P は、一方はアイデアのみを含んだ言明であるのに対し他方は個物とアイデアとの関係を含んだ言明であることにお

いて相互に異なるのだと考えるのであろうか。そのとおりだと言われるかもしれない。実際、 R と P はその一般的な型において異ならない以上。そのように考えるのがロスの真意を汲んだことになるであろう。しかし、注意すべきことが二つある。(A)上のロスの引用文において彼が「ベッドの二つのアイデアはありえないことを証明するためもうひとつの無限背進論 (another infinite argument) 云々」と言っていることがそのひとつ。(B)『パルメニデス』における **TMA** およびパラディグマ論におけるプラトンのアイデアに対するロスの評価がそのひとつである。そして、(A)と(B)とは相互に密接に関連しあっていると思われる。

(A) ロスの発言「もうひとつの無限背進論」は何を意味するものなのであろうか。プラトンが『国家』の当該箇所で言おうとしているのは、寝椅子のアイデア B' , B'' がもし万一存在するなら第三のアイデア B''' が現われてき、そしてその場合には、この B''' が唯一の寝椅子のアイデアであって、それら B' , B'' が寝椅子のアイデアなのではない。それは寝椅子職人の作るのと同じ特定の寝椅子にすぎないということである。無限背進ををほのめかすような言葉は、プラトンの発言のうちにはみいだされない。実際、ここでの議論は、プラトンの意図からしても発言そのものからしても、寝椅子のアイデアの唯一性を主張するものであって、寝椅子のアイデアの無限多を主張するものではない。にもかかわらず、ロスはここでのプラトンの議論を「もうひとつの無限背進論」という言葉で表現している。ロスをしてそのような発言をなさしめたものは何であらうか。彼の眼にはなにか次のような事態がここでの議論において成立する可能性があると思っていたのかもしれない。 B' , B'' がもつことになる相 (特質, 性質 *εἶδος*) を β として、 R を次のように再構成してみよう。これを R' とする:

R' B' , B'' が β であるならば、それら B' , B'' が β であるゆえんの B''' が在る。

さて、それに次の仮定 (H) を付け加えてみよう:

H B''' は β である。

すると、 B' , B'' , B''' はすべて β であり、そのことは、それら B' , B'' , B''' が β であるゆえんを説明する別の寝椅子のアイデア B'''' を要求する……。これは一種の無限背進論だと言わなければならない。しかし、『国家』の当該議論のうちにそのような読み込みをすることが可能だとすれば、その無限背進論は、実際、本文においてバクケイオスが示しているように、『パルメニデス』の **TMA** およびパラディグマ論のそれぞれの議論と実質的に異ならないものとなる。

(B) われわれがロスのものだと定式化した P を R' におけると同様に再構成してみよう。これを P' とする:

P' b , B' が β であるならば、それら b , B' が β であるゆえんの B''' が在る。

ここで次のことに注意しておきたい。なんらかのかたちで R' のようなものを認めないかぎり、ロスの「もうひとつの無限背進論」という言葉は理解できないこと、しかし

R' はロスの言葉そのもののうちには保証されないこと、これがひとつ。しかるに、 H は、それを一般化して

H' 或るものがそのものによって性質づけられるところのイデア そのものが当の性質をもつ。

と表現するならば、ロスはこれを明らかにプラトンの主張だと認めていること、これが第二。さらに、 P' をロスがストレートに **TMA** およびパラディグマ論の構造 だとして認めていること、これが第三である。

さて、第三の点についてはっきりさせておこう。ロスは *Parm.* 132A1—B2 におけるプラトンの議論を次のように要約する：

“Parmenides now passes to a fresh point. It is by noticing many large things that Socrates has been led to form the notion that there is a ‘large itself’ common to them all. But then must there not be a further Form of ‘large’ (C) common to the ‘large itself’ (B) and the many large things (A_1 , A_2 , &c.), and yet another (D) common to all of these, and so *ad infinitum*?” (pp. 86—87文中 ‘large’ のイタリック筆者)

このように要約したうえで、ロスはこの議論が、ただちにイデア論そのものに対してではないにしても、個物のイデアへの関係を表現するのにプラトンが用いた言語に対しては致命的なものであると認める。イデア論において慣用される「分有する」とか「模写する」とかのような言い方は、個物のイデアへの関係を言い表わすには不適切な比喩のようなものである。なぜなら、と彼はいう：

“because they both treat the Idea as if it were a thing, *instead of being a characteristic of things*. Plato’s use of the phrase ‘the X-itself’ ($\alpha\upsilon\tau\acute{o}\tau\omicron$) is open to the same objection; *for it treats the Idea of X as one X among others, and implies an X-ness common to it with others*” (p. 88, イタリック筆者)

だからである。ロスは、プラトンがXのイデアを他のXともどもひとつのXとして取り扱い、そしてプラトンがそのような取り扱いをしたのはXのイデアとXとがひとつの共通な性質 X-ness を共有すると考えたからだとするのである。*Parm.* 132C—133A におけるパラディグマ論（これもまたプラトンのイデア論に対して致命的だとロスは認める）についても、ロスは、イデアと個物との関係は相互類似関係であり、そして、それら二つのものの間の類似は、それらが共有するところの或るひとつの性質があることを含意すると言っている (p.89)。注目すべきなのは、上のロスの見解は特殊な議論としての **TMA** およびパラディグマ論についてなされているのではなく、一般論としてなされているということである。すなわち、われわれの定式化した H' はプラトンがイデアについて語ったすべての文脈において妥当だとロスが考えているということである。す

なわち、 H' を一般論として認めたらうで、特殊議論としての **TMA** やパラディグマ論がプラトンのイデア論について致命的であり、かつプラトンは諸対話篇のどこにおいても、それらをプラトンが反駁しえていないとロスが考えていることである。

さて、ロスの議論についてのわれわれの結論をひきだすべきときである。ロスは

“ R ” を証明することは “ $\rightarrow P$ ” を証明することにはならない

と言った。さて、そのようなロスの発言が何を含意するかを見てみよう。ロスは H' をプラトンのイデア論の基本命題だと認めたのであった。そこで、『国家』の当該議論は、ロスにとっては、確実に R' として翻訳されうる。また、それゆえに、 H も成り立つ。したがって、先に見たように、『国家』のここでの議論は、寝椅子のイデアの唯一性の証明ではなく、無限多の証明となるのである。たしかに、皮肉なことに、ロスの発言は誤ってはいない。しかし、その誤っていないというのは、命題 A を証明することが命題 $\rightarrow A$ を証明することにはならないというような意味においてである。 X に対応する X のイデアが無限多であると証明することが、そうしたイデアが無限多ではないということを証明することとは異なるということほど、分りきったことはないであろう。私の議論はロスに対して故意の暴力を加えているであろうか。では、ロスの発言を、『国家』当該箇所に対する彼の ‘if there had been two there would have had to be one Idea whose form they both had, which would have been the true Idea. In other words, *uniqueness is involved in the very nature of an Idea*’ (p. 79, イタリック筆者) という発言を考慮に入れて、次のように言い換えてみよう：

X のイデアの唯一性を証明することは X のイデアが無限多でないことを証明することにはならない。

ロスの発言についてわれわれは(皮肉にも)次のように結論してよいと思われる：『国家』の当該箇所でのプラトンの議論を、ロスがイデアの唯一性の主張と解するかぎりにおいてロスは誤っており、この同じ『国家』の議論をイデアの無限多の主張だと解するかぎりにおいて彼は正しいのである、と。

〔補注2〕 ロスは『国家』597C1–D3 をなんらかの証明であると認めながら、その証明がいかなる証明であるかの説明は与えなかった。また、彼が『パルメニデス』にみいだしたところの H' (上の〔補注1〕を参照されたし) を『国家』の当該議論に適用すべきか否かをも明らかにしなかった。もし彼がそれを適用したなら、彼は矛盾したことを言わざるをえなかったであろうし、もし適用しなかったならば、 H' をイデア論の基本命題として認めることをためらったであろう。これがわれわれのロスの議論に対する〔補注1〕の結論の意味するところである。しかし、ロスの議論をいっそうラディカルにすることができるのである。それは、イデアの唯一性の主張と H' とをともにプラトンの基本的命題と認める立場であって、本文においては、エイロネイアスがそのような立場から **TMA** を取り扱っている。しかし、容易に察せられるように、この立場は、プラトンの

イデア論体系のうちに根本的に相容れない二つの基本命題をみいだすことによって、イデア論を内部矛盾をはらんだ体系とみなすのである。ヴェドベリの議論はそのような立場のひとつの典型であるだろう。私はヴェドベリの鋭利な議論から実に多くのものを学んだ。しかし、私は先に定式化した H' に相当する彼の命題 (6) を受け入れることはできない。

さて、ヴェドベリによるイデア論の解釈においてわれわれの議論に関連する重要な命題は (4) および (6) である。それらは、それぞれ次のように定式化されている：

(4) イデアはそれを分有する諸対象のなかのひとつでは決してない。

(6) Y-ness のイデアは (a) Y である。

さて、ヴェドベリは『国家』当該箇所について次のように言っている：

“In *Republic* (597C) proposition (6) is implicitly employed in providing that for each kind of thing there is only one Idea, e. g., that there is only one Idea of Bed. The proof is intended as a *reductio ad absurdum* of the opposite assumption. If there were, e. g., two Ideas of Bed, two such “absolute beds”, there would again appear one which they would have as their common *eidos*, and this third would then be “the absolute bed”, the Idea of Bed, not the other two. The logic of this curious argument seems to be as follows. Suppose *per impossibile* that there were two Idea of Bed, say B' and B'' . By (6) each one of these is a bed, an “absolute bed”. Hence, by the basic postulates of the theory of Ideas, they participate in an Idea of bed, say B . From this point on the argument is probably a *petitio principii*; B which accounts for the fact that B' and B'' are both (absolute) beds, is *the* Idea of Bed. (If this is the premise to which Plato implicitly appeals at this stage of the argument, he is obviously presupposing the uniqueness that he is out to prove.) By (4), since B' and B'' participate in B , they are distinct from B . Consequently, neither of them is the Idea of Bed, and the assumption that there are two Ideas of Bed has been refuted” (146).

ヴェドベリの議論はイデアの唯一性の証明とはなっていない。それは、本文において私がバクケイオスに論じさせたように、容易に、ベッドの無数のイデアを導きだす証明に変えられるからである。

われわれは、さしあたり、二つの結論を引きだすことが可能である。(1)『国家』当該箇所において、プラトンは寝椅子のイデアの唯一性を証明しているものとみずからは確信していたのであるが、その実、彼が証明において用いた前提 ((6)) は、それをプラトンが十全な意識化の下に置いたならば、それが寝椅子のイデアの唯一性の証明と思

アイデアと同一性をめぐる対話

われていたものをただちにその無限多の証明へと転じさせるものだという意味において、彼のアイデア論を破滅させるものであることに気づいたはずなのであるが、しかし実際には、彼は決してそのことに気づかなかったのであるか、それとも（２）ヴェドベリの（６）はプラトンの思想の誤解の産物であるかである。私は第一の選択肢を拒否し、第二の選択肢を肯定する。その細かな理由は本文にゆずり、ここでは本文においては触れられえなかった若干のことを論じてみよう。

たしかに、『国家』当該箇所執筆の時点に、プラトンが、自分の採用した証明方法がアイデアの唯一性を導きだすことには役立たず、むしろかえってアイデアの無限多をこそ導きだすのに役立つものであるということに気づかなかったのだということ、そして、『パルメニデス』執筆時になってやっと彼はそのことに気づくにいたり、従来自分が構想してきたアイデア論の不十分さを自己批判する意味をこめて、今度はそれを、自覚的に、アイデアの無限多を導きだすのに用いたのであったといった事態は、考えられないことではない。しかし、そのように考えると、『ティマイオス』(31A—B)においてプラトンが言っていることが理解できないことになる。なぜなら、プラトン晩年の著作であると一般に認められているこの対話篇の当該箇所においては、『国家』のここでの議論と本質的に異なることのない議論がふたたび展開されているからである。すなわち、ここでは、神がこの宇宙を創るにあたって用いたパラディグマは一つであって二つではなかったということが次のように言われているのである：

「なぜなら、ありとあらゆる知性的生物のすべてを包括しているところのものが、それ以外の別のものといっしょにあって、二つあるもののうちの一つでありうるなどということは、決してないだろうからである。というのも、もしもそんなことにでもなれば、それら両者を包括する別の生物がふたたび存在しなければならなくなるのであって、それら両者はそのものの一部分であることになるだろうからである」(31A4—7)。

これを、われわれがこの対話篇の最初のところに引用する『国家』の言葉と比較していただきたい。これら二つはまったく同趣旨の発言なのである。ただ、『国家』においては、論旨を支える事例となるものが「寝椅子」（これについては『ティマイオス』の「知性的生物」のように《全体》と《部分》の議論は適用されえない）であり、『ティマイオス』においてはそれが宇宙のモデルであるところの *τὸ περιέχον πάντα ὅσα νοητὰ ἔσονται* だという相違はある。しかし、この相違は、おおはばに議論の文脈による相違であって、アイデア論の本質的構造 そのものにおける相違ではない。のみならず、『ティマイオス』の議論を注意深く読んでみると、われわれは、この文脈において、プラトンが、パラディグマに即して創られるのであるかぎり、宇宙は一つだと断定しているのに気づくのである (*εἷνα, εἴπερ κατὰ τὸ παράδειγμα δεδημιουργημένος ἔσται*. 31A—3—4)。

プラトンにとっては、共通名が適用される多くのものから成る集まりに対応して、そ

これらの集まりを集まりたらしめているところのパラディグマ・アイデアは一つであって二つではないのである。そして、一つであるというプラトンの前提に付け加えて、私が本文においてディオクレスに語らせているように、二つではないと証明するならば、唯一であるということを証明することになるのである。たしかにディオクレスの定式化するであろう I-2 は、プラトンの言葉そのものからストレートに引き出すことはできないとも考えられる。しかしそれは I-1 にたしかに含意される事柄なのであり、後にゲンナイオスによって補われるような側面をも含めて、プラトン思想の或る実質をかたちづくるのである。しかし、その実質については、さらに、やがてゼノンによってもちだされるような側面からの議論により、I-2 の再考へと導くのである。アイデアの唯一性と同一性とは、そのとき、天上に輝く離在形相の高みからではなく、われわれの世界、知覚世界とその地平からもう一度問題とされるであろう。

1975.11.30 (以下次号)